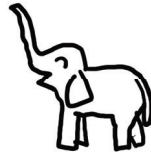


# 展示動物のウェルフェアをめぐるって



## 動物園の歴史と領域モデル

世界初の本格的な動物園は1828年に設立されたロンドン動物園になります。その後、欧米の各都市で多くの動物園が開設されますが、狭い檻の中に動物を閉じ込めて見世物にするような展示方法がとられていました。

アニマルウェルフェア（動物福祉・AW）には「5つの自由」、実験動物には「3つのR」の基本原則（40ページ表1参照）があります。

展示動物の分野では近年、「5つの領域モデル（Five domains model）」の動物福祉戦略が重要視されていま

す。世界動物園水族館協会が「5つの自由」を発展させたもので、栄養・環境・健康・行動・精神の5つの領域をもとに、動物にとって生きる価値のある生活の実現を目指すものです。

ここでの良好な動物福祉とは、「正の経験が増え、負の経験が可能な限り無い状態」です。例えば、栄養が過不足なく行き届いた状態で、環境はその場に適切なものであり、病気やケガがなく、動物本来の行動を自由に表現することができ、痛みや不安などがなく、安心かつ満足している状態のことをいいます（図1を参照）。

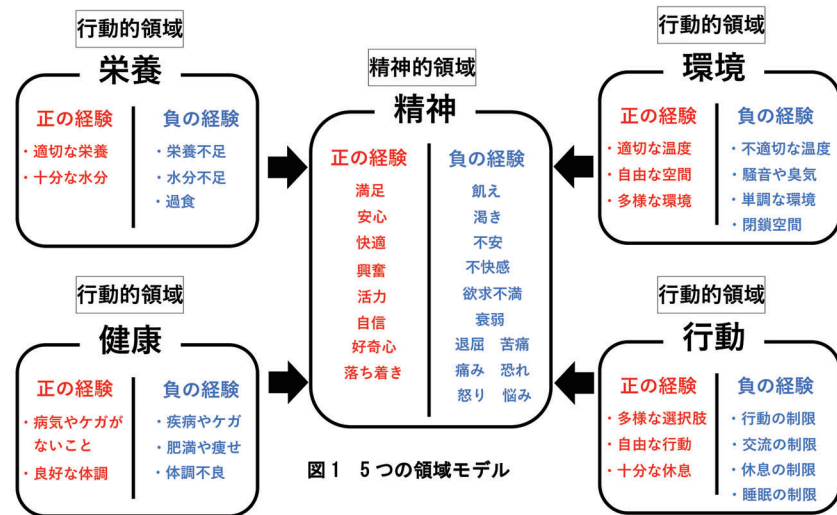


図1. アニマルウェルフェアの国際原則を発展させた「5つの領域モデル」

## 現代の動物園の役割とは

まず、動物を鑑賞する中で「命の大切さ」を感じてもらい、動物愛護の精神を育てる「レクリエーション」の役割があります。

ふたつ目は、生きている動物を見たり、鳴き声を聞くなどの体験をすることで、その生態や行動、自然環境について学び、知識を得る機会を提供する「教育」の役割です。

動物の行動を飼育員が注意深く観察することで、その生態や繁殖に関する調査・研究を行ない、科学的データをj得る「調査・研究」の役割もあります。

さらに、動物が繁殖できるよう努め、特に絶滅の危機に瀕した野生動物の保護に貢献する、「種の保全（保存）」役割を持っているのです。

## 環境エンリッチメントの試み

日本の動物園はこれまで、動物を狭い檻に収容して公開する「形態展示」が主流でした。

しかし近年、そこに動物福祉の考え方を取り入れる動きが盛んになっています。野生動物本来の多様な行動や能力を引き出し、来園者が観察できるよう工夫した、「行動展示」に注目が集まっているのです。







「ハズバンドリートレーニング」の一環で行なわれているカバの口腔内検査

飼育環境に様々な工夫を凝らし、動物の持っている能力を発揮させることで、本来の習性に基づく幸福で豊かな暮らしを実現するための試みを「環境エンリッチメント」といいます。

例えば、わざわざ高い所に設置したゾウの餌を長い鼻を使って頭上でつかみ取るなど、野生本来の採食方法に近づけるやり方を試んでいます。同種および異種動物と同居することで、別の個体からの臭いや鳴き声によって五感が刺激されるよう促す、といった方法も試行されています。

### ハズバンドリートレーニングとは

新たな取り組みとして、動物の協力を得つつ検査や治療、健康管理を行なうという「ハズバンドリートレーニング」(受診動作訓練)があります。

オランウータンの口腔内(歯科)検査や採血、妊娠した際の腹部エコー検査をする際、昔は麻酔などが必要でした。しかし今は、前もって採血などの

訓練を行ない、検査に慣れさせておくことで、本番でも落ち着いた状態で検査ができるようになったのです。

危険な動物であっても麻酔なしで検査や治療が可能になり、ストレスを大幅に軽減できるメリットがあります。わずか20年前には全て麻酔に頼っていたものが、今では無麻酔で健康管理を行ない、動物の負担を軽減できるようになりました。

### さらなるAWの向上を

海外とりわけ欧米の動物福祉の歴史は長く、展示動物の分野も例外ではありません。福祉向上の意識が高く、技術も日本より大幅に進んでいます。

外国人が日本の動物園を訪れた際、狭い檻に閉じ込めるような展示方法を嘆いたり、疑問を持つことは少なくありません。「種の保全」などの取り組みを国際的に広げていくには、動物福祉のさらなる向上が必要です。

日本でも近年、AWに配慮した動物園が増えていますが、入園者側から見ると、心配な点があります。

公立の動物園の場合、ほとんどの飼育員は地方公務員です。動物園に配属される前は土木課などに所属しており、数年後には別の部署に異動予定の飼育員の話が、あるテレビ番組で放映されました。行動展示で有名になる前の旭川市旭山動物園での話です。

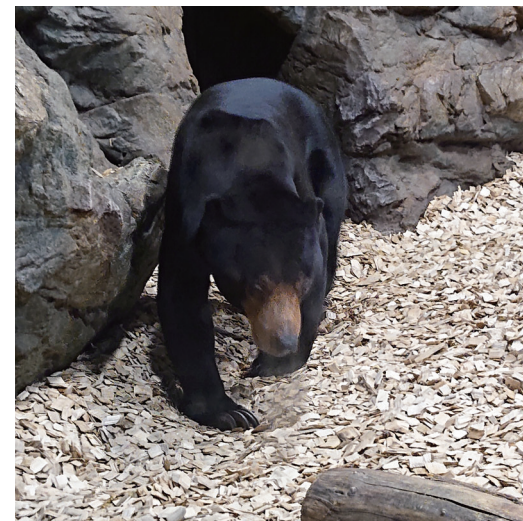
私は、動物が好きで専門的知識も十分な人が飼育員になるべきだと考えています。それは、AWを実現する必要不可欠な要素であり、動物のためにもなるからです。

希少動物の種の保存のため、動物園の間で移動が頻繁に行なわれています。しかし、親子や仲のいい個体同士の場合、急に離れ離れにすることがストレスにならないのでしょうか。希少動物の個体数を増やすことも大切ですが、ストレスにならない飼育環境作りがAWの必須項目であることを忘れてはいけません、と考えます。

以前、私の地元の札幌市円山動物園で、年老いた雌と若い雄のマレーグマとの同居訓練において、若い雄から襲われた雌が死亡するという痛ましい事故が起きました。事故後、道内外から多くの厳しい意見が殺到し、信頼回復にかなりの時間を費やしたようです。

このような試みは、他の動物園でも頻繁に行なわれています。

旭山動物園では昨年、雄と雌のつが



円山動物園では同居訓練の中でマレーグマの死亡事故が起き、批判が殺到したこともある

いのライオンとその子どもたちの同居が試みられました。こうした訓練が成功すると称賛され、失敗した場合は非難を受ける…。動物園はなかなか厳しい立場にあります。痛ましい事故を回避するには、過去の資料や経験を生かし、万全の態勢で臨むべきです。

動物の行動の予測が難しいことは言うまでもありません。アニマルウェルフェアの向上のために、動物園側は努力を重ねてほしいものです。

(徳光 綾子)

飼育動物が死亡した時に設けられた祭壇。道内外の市民から多くの花や供物が届いた(円山動物園)

